

これは多分に幸運がありましたね。決して私の力ではありません。謙遜ではないですね。別に私でなくともできたこと、ただ私ができないこともあるんですね。それは何かというと、イエローハットという会社はただ単に売り上げを上げて、利益を上げただけではない。ちゃんと社会に掃除というものを広めながら、学校へ行って一円にもならないことを、逆に費用がかかるんですね。大勢の人が道具を持つて行って、すべての費用はこちら持ちでやってるわけですから、日本を美しくする会ができて日本中にその活動が広まってきた、その母体となつたのがうちの会社、イエローハットです。ですから、ただ単に利益を上げて四季報に載ったというだけではないんです。それなら他の人だってできるんです。私は他の人にはできないこともやってきたわけですね。

**51億から上場企業への原動力②**

これはお客様を大事にしたということです。それでお客様がこちら（イエローハット）を喜ばせようとして、イエローハットから一円でも多く買いたい、そういう気持ちですね。お客様がうちの会社を育ててくださった、大きくしてくださったんです。私がいくらがんばっても一人の力なんて知れていますけれども、有力なお客様がうちからものを仕入れることで、私を喜ばせようとしてくださっているんです。お客様がどうしたらよくなるか。お客様をよくしたら、必ずこちらも良くしてくださるんです。ところが今は自分の利益を優先してしまって、口では「お客様は神さま」と言いますけども、本当にそいやつてる人はいるのかなあ……?と思いますね。

上場時の売り上げは八百数十億になつてたと思います。そこに至るまで、ある意味ではリスクも背負いました。たとえばお店を拡販するにあたつて、土地を借りるところがなければ、土地を買ってやらざるを得ない。土地という資産があつても、一方ではそれに匹敵する借り入れも発生するわけですから、そういうリスクをどこまで経営者が負えるか。そこまでしてやりたくない。私と同じ時期に始めた人も、ずーっと誰かの建物を借りて終わつてしまつたところもありましたね。それはそこから生み出す利益の享受だけ受けて、リスクは負いたくないということですね。私の周りにはそういう方がいっぱいいました。私は社員の人たちが誇りを持って仕事ができる、そういう施設を作る。お客さまが今、零細な仕事をしている、この人に大きな舞台を与えてあげたい。こちらでその舞台を用意して、その人に舞台の上で演じていただく。それで成功した例もありましたね。基本は「どうしたら人を喜ばすことができるか」ということが前提になつてやってきました。人間は自分の得にならないことをしたときに成長するんです。反対に自分の得になることしかやらない人は、人間としての成長は望めないですね。藤沢周平という人が書いた本の中に、「飯の糧にならないことが心の糧になる」。短い言葉ですが、これが正にそのことをいっていますね。それから紀元前五百年に亡くなつた中国の晏子が言つてゐるんですね。普通の人は、「益がなければ意味がない」、自分にとって益のないことは意味がないと言つてゐるんです。晏子は『益はなくとも意味はある』という道を選んだ人です。ですから二千五百年も経つた今日でも、日本でも晏嬰（あんえい）と言えば多くの人が知つていますね。

【編集後記】地元のホームニュースに「西尾を美しくする会」の活動が紹介されました。取材を受けた際、担当記者の言葉にハッとして、楔を打ち込まれました。それは、誰もがよく使う言葉ですが、取材記者から「今後の活動目標、抱負は」と聞かれ、私の想いを話したときに返ってきた言葉です。その記者は西尾市出身の著名人を多く取材していて、昨年中日ドラゴンズを引退した岩瀬仁紀投手が地元の小学生から「どうしたら、岩瀬選手のようになれるんですか?」の質問に、岩瀬選手は「目標に向かってあきらめないこと」と語ったそうです。取材を受けた著名な方は皆、「夢を実現するにはあきらめない、差僅差の積み重ね」と続けることの大切さを自分に言い聞かせてきていましたが、「あきらめない」には、しぶとさ、粘り強さ、根気強さが感じられ、新たなやる気スイッチがオンとなります。心の中のどこかに、毎月の掃除を消化すればいいという惰性的な面があつたかもしれません。目標を意識して一歩ずつ進む力を生み出す言葉、「あきらめない!」をいただけたことに感謝します。第22回愛媛便教会では、県内外から先生、生徒、掃除に学ぶ会の皆さまが多数応援に駆けつけてくださいり、主催者、世話人が感動で言葉を詰まらせていた姿が感動的でした。会場校の新居浜市立泉川中学校は素晴らしい学校です。私の知る限りでは日本一です。掃除の魅力を伝えることは易しいことではありませんが、そこにはやりがいがあり、感動があります。四国にはお遍路八十八ヶ所がありますが、掃除八十八ヶ所(学校)プロジェクトがスタートしました。既に四校が決まりました。「あきらめない」それは、「燃える青春」です。今年もワクワクがいっぱいです。

# 便 教 會 新 聞

141 亏

便教会は、教師の教師による教師のため  
掃除に学ぶ会です。「方法論や技術や手  
ただ身を低くして実践あるのみ」の教育  
の人格を高めることを目的としています。

のトイレ  
法ではない、  
方針で、自ら  
便教会新聞発行責任者 高野修滋  
〒四四五一〇八〇二  
愛知県西尾市米津町天竺桂二七  
一七〇五六三一五六一四三二七

会新聞発行責任者 高野修滋  
四五—〇八〇二

## 『十年目を前に気付いたこと』 (愛媛県) 新居浜市立鳥

(愛媛県) 新居浜市立泉川中学校  
教諭 越智 誠司

目に留まり、便器を素手で磨くことに挑戦していました。掃除に向き合いだしてまだ九か月でしたが、いつの間にか掃除は自分の人生に無くてはならない

続けてこられたことに感謝します。

平成二十二年四月、前任校で生徒指導主事を拝命  
しました。当時の勤務校は夜中に窓ガラスが可放も  
しません。

「自分に何ができるか?」一ムは考えました。そして割られたり、教師に対する暴言や授業エスケープが続いたり、校外での生徒の傍若無人な態度にクレームの電話が毎日のように鳴るなどの荒れた学校でした。また、私は女子バレー部の顧問となりましたが、訳有りの集団で心も荒んでおり、指導に困って全身に尋麻疹ができるほど悩んでいました。そんな状況でしたから、生徒指導主事として何から始めていいのかわからず、不安だったのを覚えています。

「自分が何ができるか?」利に考ねました。そして  
思いついたのが「毎朝、気持ちのよい環境で生徒を  
出迎えよう」ということでした。七時前から玄関周  
辺を掃除することにしました。私は元来熱しやすく  
冷めやすい人間なので、何が何でもこの朝清掃だけ  
は続けようと心に決めました。毎日続けていると、  
いろいろ気付くことがありました。特に感じたのは、  
学校が大変汚れているということです。それまでの  
自分には見えていないだけでした。「こんな環境で  
は子どもたちの心が荒んでいくのも無理はない」と  
反省しました。

大して変わることはありませんでした。同僚は「毎日続けるなんてすごいね」とは言うものの、誰一人いっしょにやろうとする人はいませんでした。バレー部員は相変わらずでしたし、「ゴミはすぐに落ちるのに、なんで掃除なんかするん?」と、半ばバカにしたような感じで私を見ていました。正直、「悔しいなあ」と何度も思いました。でも、やると決めたことです。自分に負けたくなかった私は、とにかく掃除を続けました。そんな毎日が続きましたが、転機が訪れました。冬休みに入つてすぐ、練習の前に私が職員トイレで便器を磨いていると、人の気配がしました。振り向くと部員たちでした。「みんなもやってみるか?」こうやってやるんじゃ、見てみ!」とトイレに誘いました。私が便器に手を突っ込んで磨くのを見た瞬間、「ありえんよねえー!」と叫ぶ彼女たち。しかし、間髪入れずにそれぞれ担任の便器を決めていき、「じゃあ頼むぞ。今日の練習は目の前の便器をピカピカにすることな!」とだけ伝えて、私は自分の便器へ。すぐにギャーギャーしゃらくの間続きましたが、いつの間にか静寂へ。こえなくなつたのです。三時間後、ピカピカになつた便器を誇らしげに見せる彼女たち。「爪を使つた

「のように朝清掃をしていると、早く登校してきた主将が言いました。「先生、私たちもいっしょに掃除がしたい。」飛び上がりたいほどに嬉しかったです。あのときの主将の顔と言葉は死ぬまで忘れません。その日からです。部員はもちろん、有志の生徒も加わり、朝清掃をする生徒が増えていきました。休日には校区に出向いてゴミ拾いを行うようになり、次第に地域の方々の評判もよくなっていました。二年後、バレーボーイズ部はボランティア部とも呼ばれるようになります。それに比例するように戦績もよくなり、たくさんのチームから練習試合を申し込まれる部になりました。数年前は態度の悪さから練習試合を断られることが多かったチームです。夢のようにでした。そればかりか、自校で試合がある日には「せっかく練習試合に来てくれるんだから、精一杯綺麗にして出迎えたい！」と、早くから集まって念入りに掃除をする部となっていました。そんな彼女たちを見て、私も「敷地内の全てを綺麗にする」と宣言し、部員とともにこつこつ活動を続けていきました。気が付くと、学校は大変落ち着いた雰囲気になっていました。地域では「日本一、美しい学校」と喜ばれるようになりました。また、不思議なことに、「先生、俺変わりたいんよ」と、やんちゃな生徒たちも朝清掃に加わるようになってきました。そんな生徒

の保護者には「家でも応援してあげてください。朝早いですが温かく送り出してやってください。僕が

した。それがまた部員たちの「もつと掃除をしよう」という意欲につながっていきました。

参加してくださいました。感謝の気持ちでいっぱいです。

しかし、いいことはかりではありますんでした。トイレ掃除を中傷されたり、「掃除ばかりして練習を全くしない」と教育委員会に何度も訴えられたり。

平成二八年四月、現任教へ赴任しました。着任の日から新天地で朝清掃を始めました。女子バレー部の顧問となりましたが、前任校での活動を知つていた当時の三年生たちは、何を言わずとも朝清掃に参加してくれました。「取り組んできたことは、場所が違つても伝わるものなんだ」と有難く思いました。ただ、私は全て自己流で掃除をやってきたので、「本物の掃除に触れてみたい」と思い立ち、『朴の森』で開催される鍵山教師塾に参加を申し込みました。初めてお目にかかる鍵山相談役のお姿、そして発せられるお言葉に、緊張と感動を覚えました。また、「やっと本物の掃除を学ぶことができる!」と安堵にも似た感情が湧いてきたのです。

ルはない。大切なのは掃除にどう向き合うか」といふことでした。やり方がどうのこうじやなかつたのです。「俺は掃除の何を学びに来ていたんだ?」と自分自身が恥ずかしくなりました。「方法論や技術や手法ではない。ただ身を低くして実践あるのみ」だということに、初めて気付くことができたのです。新居浜に帰つてから、以前にも増して積極的に掃除に取り組むようになりました。現任校には「開かずの間」がいくつもありましたが、バレーボーイといつしょに次々と整理整頓を進めていきました。部員たちも自分たちの手で学校が綺麗になっていくのが嬉しかったみたいです。部活動が休みの日でも朝早くから自主的に登校し、掃除をする部員も現れました。一年も経つと「いつ来ても美しい学校ですね」と、地域や保護者、教員仲間から言われるようになります。

（エンデ作）がある。主人公のモモと「時間泥棒」との戦いを描いた作品だ。今までの自分の教師の在り方を考える上でも、いろいろと考えさせられる内容が書かれている。その理由の一つは、資本主義社会のマイナス面が物語として提示されているからだと思う。そして、その社会の中で生きる私も、知らず知らずのうちに「当たり前」、「よいこと」として生活し、子供と対峙していったからだ。・「ムダ、ムリ、ムラ」をなくし、何でも効率優先。・「進歩、成長、目標」にばかり目を向けることで、過度を軽視。

過去、教師として力のない自分をどうにかしたいと思  
・お金などの数字を物差しにして、物事を割り切る。  
結果重視。

授業ができるか」「テストで平均90点を超えるせる」など、「モモ」に描かれる大人たちのように「効率優先」になり、「数字にこだわる」「はやく結果を出そうとする」ばかりとなり、子供達との心の距離は離れていく一方だった。時間泥棒と戦うモモの唯一といつてもいい能力は「人

の話を聞くこと」だ。これは、お金になるとという意味での「得」にはならない。また、「生産性」という意味でも、「無駄が多い」と考えられやすい。しかし、話を聞くてももう人々が笑顔とゆとりを回復していく姿はとても印象的である。翻って「教育技術一辺倒」になってしまふた私はどうだったか？子供達の話を聞いていただろう

か？子供達の姿をしつかり見ていただろうか？

振り返ると、あの頃の自分は常に成功を求めてイライラしていた。常に効率優先で、様々な事を「ムダ」として切り捨てていた。それが、子供への態度として、指導として出ていた。例えば、子供達の思いに気付かず、自分の方針や考えを優先し、押し付けてばかりだった。

参加してくださいました。感謝の気持ちでいっぱいです。

最近、心底思うことがあります。「世の中に当た  
り前のこととはひとつもない」ということです。掃除  
で考えると、毎朝私といつしょに活動してくださる  
同僚たちがこういいますが、決して当たり前ではな  
いです。

## 『学びを深める・広げる』

愛知県扶桑町立扶桑東小学校  
教諭 木原 勝利

児童文学作品の名著の一つに「モモ」(ミヒヤエル・

びがたくさんあった。その中で、「ムダとして切り捨ててきたことの中にこそ、豊さがあった」「幸せな未来は、今を犠牲にした先にはない」「目標にこだわるとノルマになり、楽しさが奪われる」ことを実感として学ばせてもらった。

（）3、4年間は、中学年を担任することが多い。高学年との違いはあるかもしれないが、教室の事務机の周りに子供達が集まるようになった。それは、何か作業をしていても手を止めて、子供達の話、心の声に耳を傾けられるようになつたからだ。子供達と冗談を言い合いながら笑つていられるようになったからだ。モモのようにな「話を聞く」ことに集中して、「無駄な時間」と考ふなくなつたからだ。そして、子供達の話の裏側、どうしてそんな話をするのか、どんな思いがあるのか等、その子の背景に目を向けられるようになつてきたからだ。このことも「目に見える部分だけの汚れを気にしていましてたが、目に見えない奥の方にも汚れがあることに驚きました。子供と接する時も、見えていない部分も気にしていなくてはいけないなあと思いました。」という仲間の声からの学びがあつてこそのことだ。

今後、A-Iが代わりに行う職業が数多く出てくると予測されている。しかし、人(子供)と直接関わることに意味がある教師の仕事自体はなくならないはずだ。逆に、今以上に子供達と真剣に向き合っていく力、関わっていく力が要求されてくる。子供達の気持ち、悩み、成長をつかむためには、教師自身が「気付く」力を上げるしかない。そして、その気付きをもとに子供達と向き合っていくと、響き合う教育活動はできない。また、「今、ここを生きる子供」「ムダを楽しむ子供」と同じ感性をもち続けれないと意味ある教育活動はできない。子供を受け入れられる器の大きな教師になるためにも、今後も便教会での学びを深めていきたい。

第19回便教会総会は8月24日  
「トイレ掃除は気づきの宝庫」

第11回便教会総会は8月2日  
「トイレ掃除は気づきの宝庫」

24回となつた。毎回、参加者の方の声と五感を通じた学

